

その他

**若手看護学教員が実習指導において抱えている課題の共有
—平成29年度 看護学科FD委員会「若手看護学教員のためのFD
活動」企画報告—**

Common Issues in Clinical Teaching Faced by Junior Faculty in Nursing

— FY2017 Report on FD Committee “Faculty Development Activities for Junior Faculty in Nursing” —

伊東真理 秋山美紀 鈴木朋子 濱田麻由美 前田のぞみ 佐々木美奈子

Mari ITO, Miki AKIYAMA, Tomoko SUZUKI, Mayumi HAMADA, Nozomi MAEDA, Minako SASAKI



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈そ の 他〉

若手看護学教員が実習指導において抱えている課題の共有 －平成29年度 看護学科FD委員会「若手看護学教員のためのFD活動」企画報告－

Common Issues in Clinical Teaching Faced by Junior Faculty in Nursing
－FY2017 Report on FD Committee “Faculty Development Activities for Junior Faculty in Nursing”－

伊東真理 秋山美紀 鈴木朋子 濱田麻由美 前田のぞみ 佐々木美奈子

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

Mari ITO, Miki AKIYAMA, Tomoko SUZUKI, Mayumi HAMADA, Nozomi MAEDA, Minako SASAKI

Division of Nursing, Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

要 旨：本学科では、平成29年度FD委員会にて「若手教員同士で実習指導において『印象的だったエピソード』、『大切にしていること』等の情報共有をし、抱えている課題解決の糸口を見出すことが出来る」を研修目的とし、若手教員が教授活動を行う実習指導に焦点をあてたグループワークに取り組んだ。研修後アンケート結果より、「自分だけではない」と思えて安心した」、「他の先生方が日々の講義・実習でどのような工夫をしているか、“リアル”が聞けて、これからの活動の参考になった」等の意見が聞かれ、研修を通じて参加者個々の課題の共有が進み、解決に向かうための糸口となる対話が出来たと推測された。

キーワード：若手看護学教員、FD、支援、委員会活動

Keywords：Junior Faculty in Nursing, Faculty Development Activities, Committee Activity

I. はじめに

文部科学省は平成19年度大学設置基準の改定において、これまで努力義務とされていたファカルティ・ディベロップメント（以下、FD）を義務化することを定めた。つまり各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながる取組み（FD）を積極的に行うことが望まれている。このような背景のもと、看護系大学の組織全体の教育力を高める上で、新人教員に対するFD活動の検討が急務であるとの指摘もある¹⁾。本学科はこれまで、若手看護学教員（助手・助教の看護学教員、以下、若手教員）を対象として多様なFD活動に取り組んできた²⁾。本学科が今後も将来にわたり発展し続けていくためにも、FDを通して若手教員の教育力向上に向けた取り組みを進めていくことは重要な役割を持つと考えられる。

そこで、平成29年度の本学科FD委員会にて若手教員の教育力向上を支援する目的で、若手教員が主に教

授活動を行う実習指導に焦点をあてた研修に取り組んだ。今回、その取り組みについて報告する。

II. 研修方法

1. 企画案の作成

企画するに当たり、参加対象者に希望する研修内容の事前調査を確認的に実施した。結果、看護師・保健師・助産師・養護教諭など11領域にわたる専門領域の異なる9名より回答が得られ、研究活動・教育活動・職務遂行・継続学習のうち、教育活動に関する研修への参加希望が多数であった。また、その中でも特に実習指導において抱えている課題の情報共有を求める意見が散見された。そのため、若手教員が実習指導において抱えている課題解決の糸口を見出すことを目的とし、企画を立案することとした。

2. 研修目的

若手教員同士で実習指導において『印象的だった

エピソード』、『大切にしていること』等の情報共有をし、抱えている課題解決の糸口を見出すことが出来る。

3. 情報共有（対話）の方法

- ・FD委員が下記(1)～(3)の対話テーマごとにブース（場所）を設定し、参加者は各ブースに分かれて計3回の対話を行った。参加者は、ブースごとにテーマについての各自の考えを付箋に書き出し、付箋を模造紙に張り付けながら対話を行った。また、各ブースにはFD委員を配置し、対話のファシリテートを行った。
- ・1回目の対話は、FD委員が参加者を(1)～(3)のテーマに割り振り対話を行った。
- ・2回目、3回目の対話では、参加者自身が(1)～(3)のうち関心のあるテーマのブースに自由に移動し対話を行った。
- ・計3回の対話終了後、ブースごとに話題に上がった内容を元に、「実習指導能力を養うために明日

からできること」等の観点で発表し合い、交流した。

4. 対話テーマ

- (1) 過去の実習指導において印象的だったエピソード（困難に感じたこと、上手くいったこと）
- (2) 実習指導において個人として大切にしていること
- (3) 過去の実習指導を通して考える課題、課題解決に向けて学びたいこと・力をつけたいこと

5. 時間配分

時間配分は各テーマ20分のうち、開始5分はテーマについて、参加者各々が考えを整理する時間としその後15分で対話を行った。

6. 研修会場の環境づくり

研修会場の環境づくりとして、会場全体にリラックスできるような音楽を流した。

表1 各対話テーマにおいて共有された意見

過去の実習指導において印象的だったエピソード（困難に感じたこと、上手くいったこと）
・指導がわかりやすいと言ってもらえた時 ・現場の実習指導者とツーカーで話ができた時 ・実習に来ているのにナース服、靴を忘れてくる学生がいた ・学生が教員の想像以上に、色々感じたり考えていたことがわかった ・学生の病態に関する知識が少ないので、看護につなげる前段階の指導に時間を要する ・終了時に学生から「楽しかった」という意見が出た時 ・実習環境による学生の学びの差が大きい ・学生が実習の振り返りをすると、全て主語が「自分」になってしまう ・正座ができない、自転車に乗るのが苦手、等の学生が想像以上に多い
実習指導において個人として大切にしていること
・否定ばかりしない ・学生の疑問には必ず対応する ・学生の脅威にならないようにする ・学生がなぜそう考えたのかを最後まで聞く ・挨拶、良いコミュニケーションをとるための初めのコツを伝える ・学生の良いところを見つめてほめる ・「看護とは」と問いかけ続け、考えさせる ・学生の言語化を助ける ・学生の精神面の支援 ・ケアの主体は学生ではなく、患者さんであること ・現場との対話、実習環境づくり ・自分が看護を楽しむ姿を見せる
過去の実習指導を通して考える課題、課題解決に向けて学びたいこと、力をつけたいこと
・学生の状況把握を助ける力をつけたい ・疾患に対する知識を付けることが課題 ・待つ力、発問力をつける ・学生の主体性を伸ばす関わり、対話力をつける ・時間の有効活用術を学びたい ・場の調整力、時間の調整力をつけたい ・カンファレンスの方法を学びたい

III. 結果

1. 研修参加者の概要

参加対象者となる若手教員は助教 11 名、助手 6 名計 17 名であった。その内、参加者は 15 名であった。尚、参加者は自由意思に基づいて研修に参加した。

2. 各対話テーマにおいて共有された意見

1 回目から 3 回目までの対話において共有された意見を総括し、テーマごとに分けて表 1 に示す。

3. 研修後アンケート結果

参加した 15 名を対象に、研修に参加した目的、研修による成果および研修に参加しての感想、研修全体を通しての運営に関する意見を問う無記名・自由参加のアンケートを実施した。尚、本学科紀要等

に掲載することに同意する場合、提出するよう依頼した。結果、13 名より回答が得られた。その結果を表 2 に示す。

IV. 考察

1. 研修内容

各対話テーマにおいて共有された意見として、若手教員が実習指導において個人として大切にしていることとして、「「看護とは」と問いかけ続け、考えさせる」、「自分が看護を楽しむ姿を見せる」等の意見が共有されていた。この点より若手教員は、学生に最も近い距離で指導に携わる教員として、実習指導を通じて、看護実践の意味や面白みを伝えたいと

表 2 若手看護学教員のための FD 研修 研修後アンケート結果

研修に参加した目的
・同職位の先生方との情報共有の機会にしたい ・実習における課題の共有 ・実習指導で困難に感じていること、教員としての構えについて、他の教員とのディスカッションを元に参考にしたいと考えた ・自身の困っていることへの助言をもらい、他の先生方の考えを知りたかった ・よりよい実習指導に向けて、示唆を得たかった ・実習指導における指導上のポイント、心がけることや課題抽出について、視野を広げたかった ・他領域の先生方との悩みの共有と教育観の学びにつなげたかった
研修による成果、参加しての感想
・他領域の先生方の意見を聞けて、励まされた ・もっと研鑽しなければいけない、と痛感した ・自分の課題が明確になった。また、自分が成長するために多様な支援を受けているのだと改めて思えた ・初心に戻ることが出来た ・「自分だけではない」と思えて安心した。また、その対処方法も聞けて参考になった ・明日から取り組めることを具体化できてよかった ・他の先生方が日々の講義・実習でどのような工夫をしているか、どのようなことを心がけているか、「リアル」が聞けて、これからの活動の参考になった ・指導へのヒントや学生に対しての姿勢など気づかされることがあった ・自分の体験から得た学びや課題をより明確に意識することができた
研修全体を通しての運営に関する意見
【良かった点】 ・3 周して、沢山の先生方と意見交換できて良かった ・なごやかな雰囲気が作られていて、話をしやすかった ・このくらいの時間が集中できて良かった。業務にも支障もない ・他の教員、領域と忌憚なくディスカッション出来て良かった ・研究、講義等に関しても力をつけていきたいので、FD で取り扱ってもらえると嬉しい ・雰囲気が良くて話しやすかった ・いつも快適に研修が受けられる配慮がある ・3 つのテーマに整理してディスカッションする方法は、内容を整理しやすいと思った 【悪かった点】 ・時間がタイトだった ・エピソードを書きだす時間が必要だったので事前に想起しておくようにすると、ディスカッションの時間が多く取れるのではないかと

考え行動していることが推察された。考える課題としては、「学生の主体性を伸ばす関わり、対話力をつける」、「学生の状況把握を助ける力をつけたい」等の意見が共有されていた。この点より若手教員は、学生が主体的に実習に取り組める関わり方について、自身の力をつける必要性を認識し、課題として捉えていると考えられた。

また研修参加の目的としては、参加者同士の経験の共有を通じて、視野の広がりや教育観の深まりを期待し、参加していた者が複数であったとわかる。研修による成果として、「自分だけではない」と思えて安心した。また、その対処方法も聞けて参考になった」、「他の先生方が日々の講義・実習でどのような工夫をしているか、「リアル」が聞けて、これからの活動の参考になった」、「自分の体験から得た学びや課題をより明確に意識することができた」等の意見が聞かれ、参加者個々が抱える思いや課題の共有を通じて、課題解決の糸口となる対話ができたと推測された。

研修全体を通しての意見としては、「和やかな雰囲気話がしやすかった」、「このくらいの時間が集中できて良かった。業務にも支障ない」等の意見のほか、「時間がタイトだった」との意見が聞かれ、具体的には「エピソードを書きだす時間が必要だったので、事前に想起しておくようにすると、ディスカッションの時間が多く取れるのではないか」といった意見が寄せられた。今回、複数のテーマを設けテーマごとにメンバーの移動を取り入れたことで、参加者同士での交流の機会を増加する支援ができた一方、1つのテーマに対して対話時間が15分程度しか確保できなかった。その結果、上記の意見が聞かれたものと考えられる。今後は、対話型の研修を継続して行っていく際、時間の活用について再度検討していく必要がある。

2. 若手教員が実習指導において抱えている課題を共有する意義

林らは大学におけるFD活動が義務化される中、看護学実習を含む教育実践能力に関するFDの実施

については必ずしも十分とは言えないと述べている³⁾。本学科においても、研修運営に関する事前アンケートを実施した結果、実習指導に関する課題共有をテーマにしたいとの意見が散見された。この結果からも、実習指導に取り組む中で困難感を抱えている若手教員が一定数いることが想定される。

上記背景や研修後アンケート結果から、今回研修の場を通じて若手教員が実習指導において抱えている困難や達成感、自己課題について言語化する機会を設けられたことは、課題を解決していく方策を改めて考察する一助になりえたと考えられる。そしてそれは、若手教員の教育力向上の基盤づくりを発展させていく上で重要な意義があると考えられる。

V. まとめ

今回、若手教員のFDを支援する目的で研修に取り組んだことによって、領域を越えて若手教員が実習指導において抱えている課題を共有することができた。今後も研修を通じて、領域を越えた課題共有の場を継続的に持ち、教育力向上の基盤づくりをさらに発展させていく必要がある。

引用文献

- 1) 石田佳代子. 看護系大学の新人教員に対するファカルティ・ディベロップメント (FD) 推進のための文献調査に基づく課題. *看護科学研究* 2010; 9: 10-18.
- 2) 須藤麻衣, 阿達瞳, 竹内博美他. 若手看護学教員のFDに関する多様な支援の実態—平成25年度 看護学科FD委員会活動(一部)から—. *東京医療保健大学紀要* 2014; 9 (1): 31-35.
- 3) 林優子, 山口桂子, 正木治恵. 看護学の将来を担う次世代のためのFDのあり方 平成22年度日本看護系大学協議会FD委員会調査報告 若手教員に求められる資質・能力獲得状況と支援に関する実態およびFD活動の方向性. *日本看護科学会誌* 2011; 31 (2): 97-100.